

氏名	鈴木 亜季
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	甲第1090号
学位授与の日付	平成27年3月12日
学位論文題名	舌扁桃切除術の有用性に関する研究 －アンケート調査を中心に－
指導教授	鈴木 賢二
論文審査委員	主査 教授 内藤 健晴 副査 教授 岩田 仲生 教授 八谷 寛

論文内容の要旨

【はじめに】

アデノイド・耳管扁桃・口蓋扁桃・舌扁桃、加えて咽頭側索・咽頭後壁の孤立リンパ節から成るWaldeyer咽頭輪は、幼少期には体内の主な免疫機構を司るが、成長とともに通常は縮退する。そのうち舌扁桃は通常思春期以降に増大を開始し、肥大型・慢性炎症・急性炎症が生じた場合には違和感や閉塞性睡眠時無呼吸症候群 (obstructive sleep apnea syndrome : 以下OSAS)、炎症激化による高熱・嚥下障害・呼吸困難などの様々な問題を呈することとなる。根治的かつ有効な治療法として舌扁桃切除術が挙げられる。

【目的】

舌扁桃切除術はその手技の煩雑さなどから現在でもあまり行われていない外科的手術であり、さらに周術期や術後の患者の視点での検討となると、著者が渉猟する限りでは国内外でも皆無である。したがって本研究は、実態の把握を行うとともに、今後の医療現場への貢献を目的としている。

【方法】

過去5年間(平成21年1月～平成26年1月)に当科で諸検査により舌扁桃肥大と診断された患者のうち、舌扁桃切除術を行った患者28名に対して主訴・痛み・周術期の問題点等に関するアンケート送付を行った。そのうち回答のあった24名(女性11名、男性13名)の回答内容とカルテ上の各種情報につき統計学的検討を加え考察を行った。なお、この研究は当大学倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

男女比・年齢差に有意差はなく、主病名では舌扁桃炎症例に対しOSAS症例が有意に多い結果となった。BMI(body mass index : 以下BMI)については男女ともに舌扁桃炎症例に対しOSAS症例が有意に肥満傾向を示した。手術に至るまでの待機時間は男女ともに舌扁桃炎症例に対しOSAS症例が有意に長期であることが確認された。術式は必要に応じて

舌扁桃切除術に口蓋扁桃摘出術・軟口蓋咽頭形成術・鼻中隔彎曲矯正術・下鼻甲介粘膜焼灼術を組み合わせて行った。手術時間に関しては舌扁桃切除術のみで行われた手術時間と、その他術式を加えた手術時間では手順以上の差は認められなかった。手術前後で無呼吸・低呼吸指数 (apnea-hypopnea index : 以下AHI) を計測した9症例では有意に改善を示し、有効以上の評価が得られた症例は7例であった。痛みの強さや継続期間の評価では各個体ではばらつきがあるものの、総じて予想していたよりも強かった。また痛み以外に問題とされた点として味覚障害と咽頭違和感が挙げられたうえ、場合によっては長期間継続するとの回答が得られた。総合的に考えて手術を受けて良かったと答えたのは男女別では共に7割以上、疾患別では舌扁桃炎症例では6割前後、OSAS症例では8割以上であった。

【考察及びまとめ】

今回、国内外においても類を見ない患者の視点での周術期・術後の評価を行い、今後の医療現場の助けとするべく、アンケート調査を行った。結果から、OSAS症例と舌扁桃炎症例間の比較ではBMIや手術待機時間などに統計学的に有意差が認められた。また、舌扁桃切除術の舌扁桃炎症例への有用性はもちろんのこと、AHIの改善をみても、患者本人の評価をみても、OSAS症例においても有効な治療法であると証明された。しかしながら、術後の問題が痛み留まらず、味覚障害や咽頭違和感として長期間に渡り残存する可能性があることが初めて明確となった。本研究により舌扁桃切除術の術後有害事象であるこれらを最小限に止めるためには、術前説明時に今まで以上にこれらの事柄について説明するとともに、術式の改良と手術時間短縮や手順、機器の選択など、術者側で改良し得るものについては考察していく必要があることが明らかにされた。本研究論文が、今まで諸理由により敬遠されがちであった舌扁桃切除術に対する理解の一助となり、舌扁桃肥大症患者への術前インフォームドコンセントと手術施行および術後管理の助けとなることを望みたい。

論文審査結果の要旨

舌扁桃切除術は重要な手術手技ではあるが、適応決定や手技上の困難さ、手術の危険性から一般的に普及した術式ではなく、適切に臨床評価された報告は極めて少ない。さらに、その評価を患者の視点から検討した研究は国内外で皆無である。そこで今回、著者は本術式を施行した24例の臨床的検討と患者への質問紙法による調査を行った。対象は、舌扁桃肥大による閉塞性睡眠時無呼吸症候群患者と舌扁桃炎症患者であった。客観的な有効性を示す指標としての無呼吸低呼吸指数は術後に有意差をもって改善し、患者の主観的な有効性評価も今回の検討で新規に明確にされたが、一方で質問紙調査から、術後の痛みは術前に想像した以上で退院後も遷延し、味覚障害や咽頭違和感が頑固に持続するなどの副症状も顕著であることが合わせて分かった。これらの成績は、今後、本手術法の適応やインフォームドコンセントに反映されるべき重要な情報をもたらすこととなった。以上のことより、本研究は国内外で初めての臨床的知見がいくつか認識され、博士論文に十分値するものと判断した。